《論　説》

警世の発刊に際して
友人松村君に告ぐ

内村鑑三

雑誌「警世」友人松村介石君の手に由て出んとす、余は謹んで之を歓迎す。

余は松村君を知る茲に十有五年、余の宗教的信仰に於て、社會改良上の意見に於て、余は君と全く説を共にする能はずと雖も、而も常に君の白き心と闊き量とに服し、君の教指を受くる事屢々あり、曾て友人大西祝君或人に語て曰く「両村互に相似て亦は大に異る」と、余は松村君に於て潔白なる日本男子と宏量なる東洋の志士とを發見し、少くとも余の國家的關係に於て余は君の同國人たり同時代の人たり且つ同希望の人たるを以て名譽に感ずる者なり。

松村君は先つ國を革めて然る後に個人に及はんと欲す、余は先つ個人に眞生命を注入するにあらざれば國政は談するに足ざるものなりと信ず、松君勿論深き宗教心を有す、然れとも君は余の如く未だ全く坊主主義に化せられざるが如し、君の現世に於ける希望は余のそれよりに優に大なり。

然れとも余も亦肉の人、現世に存在する間は君の援助を借らざるを得ざる事數次なり、曾てスターリングが其友カーライルに書送て曰く「若し彼處にて君が用を爲すを得ば何の幸か之に若かん」と、余も亦松君に同じ事を言はんと欲す、即ち余にして若し少したりとも君に供するに「彼處」に關する智識と實驗とを以てし、君をして足下の國土を看ると同時に頭上の鏗の國を忘れざらしむるを得ば、余は君に對する余の友愼的義務の一部分を盡して得たりと信ず、君既に幾回が現世の迷路より余を救ひ出したり余も又何にか君に報する所なくして可ならんや

人は多くして友は尠し、今や信任なるもの殆んと此國土より跡を絶んとする時に方て、余輩努めて友人の事業に出來得る丈けの贊成を表せざるべけんや、余は君が此擧に出しを見て、新なる勢力の余自身に加へられしが如くに感ず、故に余は自身の成功を祈るが如くに君の成功を祈らんと欲す、若し夫れ余の責を負ふ雑誌と新聞紙とより幾干の時間を奪ひ得ば余は喜んで之を松君の事業に献せんと欲す、松君それ勇を鼓して進め。三たび信州に入らんとするの前夜

（注、明治三十三年十月十四日記と推定される。著作集十九巻二十六頁参照）

英雄崇拝論

哲人カーライルの著にして友人住谷天來氏の翻譯なり、カ氏の著にして外國語への翻譯に堪ゆる者は唯此書のみなりと信ず、余は天來氏の原稿を以て數ヶ所に於て原書と對照したりしに能く其精神を汲み意を通ず事を見たり、余が天來氏の天才に服に至りしは實に氏の此譯文に由るものなりとす、「英雄崇拜論」、其名既に我邦青年の心を引くに足る、然れともカーライルに所謂崇拜なるものは東洋の日本に於けるが如き奴隷的崇拜にあらず、英雄崇拜すべし、然れとも神を拜するが如くに拜すべからず、此書盡し此誤迷を解くに足らん乎、余は謹んで茲に此有益な譯書を歓迎す。

内村鑑三

《書簡》

隅谷八朔宛　明治三十三年七月十七日

拝啓先日は御訪来被下、面倒なる仕事御引受被下幾重にも有難奉存候、偖て今朝は新社員罷出で下宿の儀に付き願出候処、同人の使命に少々行違あり、返て御心配を掛け恐縮の至りに存候、実は一人前一日金弐拾五銭とは当校に止宿するものとしての計算に有之、それにても別に夜具料を請求する筈に有之、殆はや他に御依頼申すに於ては三十銭は愚か四十銭でも仕払ふは適当の事にして、其点に於ては御都合に任かす積りに御座候、弐拾五銭と申すは当校に於て受くべき食費に有之、是を御参考までに申上げよと申付し義に御座候間其誤解の点は呉れ〳〵も御了解被下たく願上候、

依て貴家に願上たき者は稍々富有の者にて一日一人前三十五銭以上の出費に堪ゆる者と致すべく、何れにしろ何方に対しても金銭上の御損失と不愉快とは決して御掛け不申決心に御座候間其辺に就ては御心を悩まさるる事のなきやう呉れ〳〵も願上候、右は小生明日にも参上申上べきなれとも今や事務多忙を極め候際なれば先づ以て手紙にて申上候　早々

内村生

隅谷兄　七月十七日夜

〔封筒表〕神田区仲猿楽町十四、隅谷八朔様、至急親展〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町大字角筈百一番地、東京独立雑誌社、内村鑑三、七月十七日

住谷天来宛　明治三十八年十一月二十二日付

拝啓、其後御変りなきことと存候、

別紙小額差上候間御落手被下たく候、

クリスマス号原稿は成るべく早く御送り被下たく願上候、

貴君が上州に退かれし天意は今に至りて明白に相成候事と存候、前橋に於ける君の友人は君の感化の下に奮起しつゝあり、小生は遠からずして前橋に強堅なる教友会の起らんことを望み申候、或るアレージメントに由らば小生当分の間二ヶ月に一回位ひづゝ御地に参上致しても宜しく御座候、松宮、深沢、森川の諸君と御相談願上候、

早々

十一月二十二日

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様、親展〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇壱番地、新希望社、内村鑑三、十一月二十二日

住谷天来宛　明治三十八年十二月四日

拝復、陳は前橋教友会設立の御計画有之候由大慶の至りに存候、就ては餘り寒くならぬ内に小生参上仕りたく候間若し諸君に於て御差支無之候はゞ来る十五日(金曜日)午後参上候間左様御承知願上候、但し若し当日御差支有之候はゞ一寸と御通知願上候、旅費等のことは御心配に及び不申候、唯罪悪を以て満ち充ちたる上州の地を聖成するに足る心霊的団躰の起らんことを望み候、又起ることを確信致候、

会合は夜が宜しきことと存候、公会演説等は御見合せ願上候、始めは会員丈けの心的結合を固ふすることが大切と存候、

弁天町河野要治方

石井外三郎

も必ず御加へ願上候、　早々

鑑三

十二月四日

天来兄

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様、貴酬〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇壱番地、新希望社、内村鑑三、十二月四日

住谷天来宛　明治三十九年七月七日

拝啓、其後御変りなきことゝ存候、
昨日森川君御訪来被下、御地の御様子色々拝聴仕り大悦に存候、貴兄が御地に退かざるを得ざるに至りしは深き神の摂理の存する所と存候、決して御歎息なさるまじく候、
貴稿スーテエッフ傳誌面の都合附かす今月は掲載致し兼ね候、来月分には必ず掲載仕るべく候間左様御承知被下たく候、
御地へ参上致したしとは存じ候え共、前橋行の前日となると何にか悪いことが来るのが例なれば家内一同イヤガリ申候、其中機を伺ひ参上致したく存候、
小生も、益々孤立、近頃札幌の旧友連と一衝突仕り、不愉快に存候、斯世の俗人連とは到底ダメとつく〴〵諦め申候、
右申上たく早々

七月七日　　鑑三

天来兄

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様、親展〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇壱番地、聖書研究社、内村鑑三、七月七日

住谷天来宛　明治四十年一月二十九日

拝啓、御見舞に与かり有難く奉存候、今年は昨年よりも餘程軽症に御座候間御安心被下たく候、但し執筆六ヶ敷く、雑誌編輯困難にてそれには閉口仕候、
貴兄に於ても御悩みの由深く御推察申上候、御互ひ毎年の寒気にやられるには殆んと閉口仕候、充分の御療養願上候、小生も別に名医にも罹り不申、大抵は養生と信仰とにて過ぎ申候、病気は信仰の鍛錬と見るよりは恩恵下賜の機会を供せらるゝことゝ見る方適当と存候、我等は益々東洋風の義人とならんと欲するの念を絶ちてクリスチャン的の小児となりて神の恩恵を仰ぐの態度に達すべきことゝ存候、時々御様子伺ひたく存候、家内よりも宜しく申出候　草々

一月二十九日　　内村鑑三

住谷天来君

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様、貴酬〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇一番地、聖書研究社、内村鑑三、一月廿九日

住谷天来宛　明治四十二年八月十七日

拝啓、今年は暑気殊に烈しく有之候所、貴兄並に御一家には如何あらせられ候ひしや伺申上候、
小生は二ヶ月間何をも為さず、濫読と怠遊とにて消費致し候、目下は家族は九十九里友人の所へ客に参り居り、小生は一人にて留守致し居り候、
扨、櫟林集第二輯今月今日頃発行致すべく筈の所、前述の次第にて暑気に苦しめられ、頭を使ふ能はず、依て止むを得ず休刊致すことに決し候、就いては予ねて御預かりの貴稿は之を雑誌に掲げることに致し候間右不悪御承知被下たく候、
当時は此世よりは益々遠かり、我れ彼を解せず、彼れ亦我を解せずとの状態にて当方に取ても至て幸福に御座候、ヒューマニチーに尽すとは俗人と交際すると云ふことには無之ことと存じ候、単独にても大に人類のために尽すことが出来ると存じ候、近頃バウルセン著カント伝を読み、大に此事を感じ申候小生は近来益々パウロの偉大なりしを感じ申候、彼れ程世に誤解さるゝ者は無きと信じ候、彼れ今、基督教会の中に現はるゝならば必ず破壊者として信者に排斥せらるゝことゝ存候、
右伺ひかた〴〵申上候　　草々敬具

八月十七日　　鑑　三

天来君

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地、内村鑑三、8—17

住谷天来宛　明治四十二年十一月十六日

拝啓、御書面に接し、御変りなき由大慶に奉存候、当方例に由て例の通り、此世の希望は更らに無きも、天国の希望は益々瞭かに相成り、歓喜の中に日々を送り居り候、

雑誌御落手のことと存候、時には御批評を賜はりたく候、イブセン論御出来に相成り候はゞ拝見致したく存候、善き時機を見計らひ掲載仕るべく候、樸林集は手数と入費多く、且つ其れ程までに益尠く存候間或ひは差止めん乎と考へ居り候、

前橋にて御働らきの由結構に存候、少くし上州人の眼を開らきたきものに御座候、常に天下の尾に附いて行く彼等は実に憐むべき者に御座候、然し愛兄の御地に在るは彼等の大幸福と存候、

当方一同よりも宜しく申出候、匆々

十一月十五日　　鑑　三

天来兄

〔封筒表〕群馬縣群馬郡国府村、住谷天来様〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地、内村鑑三、14—15

住谷天来宛　大正十一年十二月二十日

敬愛する天来君、

御書面拝見、先づ以て御平安を賀します、御漢詩有難く存じます、小生近頃また Poetic Muse の襲ふ所となり何よりも詩と歌とを愛します、Milton と Whittier は最も善き友人であります、封入例年の通り少額を差上げます、餅代として使用して下さい。御互に上州人は肥後人や江戸ッ児の為すやうな事は為し得ません、然し天下は我有であるやうです、愉快です、　匆々

一二月二〇、一九二二　　鑑　三

小為替に消字があります、多分差支えない事と思ひます若しあったら御返し下さい、別に差上げます

〔封筒表〕群馬県富岡町、住谷天来様〔封筒裏〕東京府下淀橋町柏木九一九、内村鑑三

青木庄蔵宛　昭和二年一月五日　　内村鑑三

青木庄蔵君

拝啓、禁酒会今回の事件に関し小生は貴兄に対し深き御同情を表します。貴兄に缺点のあるは止むを得ずとして、貴兄の反対者が唱ふるが如く、貴兄に不信者的野心ありしとの事は、二十年来の貴兄の知友として小生は決して之を信じません。小生は貴兄の誠意誠実を裏書きします。

禁酒会今回の行違ゐは其大体の方針の誤りたるより起りたりと信じます。米国流の社会又は政治運動となす事が凡ての錯誤の基因であると信じます。爾かなすが故に此世の政治家其他の有力者の賛助を仰がざるべからざるに至り、其結果として腐敗が禁酒会其物の内に入ったのであると信じます。社会に頼むこと多くして神に頼むこと尠き時に腐敗は何処でも入らざるを得ません。今回の事件の起因は茲に在ると思います。故に第三者として小生の望む所は係争の諸君が茲に祈祷会を開かれ、会としての今日までの行動が此世的であることを懺悔し、新たに信仰本位の行動に就かれんことであります。此点に於いて教会、青年会、禁酒会が皆な同様であると思います。御互に茲に全世界を害しつゝある米国主義を一掃致さねばなりませ

ん。其後に真の平和と成功が臨むと信じます。御見舞傍々申上げます。　敬具

昭和二年一月五日

我等クリスチャンとして後藤、渋沢、阪谷と云ふやうな人達の賛助をかりずはならぬ事業は為さざるに若かずと信じます。

〔封筒表〕市外西巣鴨町新田七七七、青木庄蔵様、御見舞　〔封筒裏〕東京府下淀橋町柏木九一九、内村鑑三、一月五日

住谷天来宛　昭和三年十二月二十日

愛する天来君：御書面に接し変らざる御友誼を謝します。Many are the afflictions of the righteous, but the Lord delivers them from all であります。此時代此国が特別に悪いのではありません、此世界が全部悪いのであります、故に信者は此世界が全部滅びて新らしき世界の造らるゝのを俟望むのであります、さう思へば万事が感謝であります。

茲に少額を封入します、餅代です、幸福なる新年を迎へられんことを祈ります。　匆々

一二月二〇日　一九二八、

内村鑑三

封入　拾円券一枚

〔封筒表〕群馬縣富岡町、住谷天来様、書留　〔封筒裏〕東京市外淀橋町柏木九一九、内村鑑三、昭和三年十二月二十日

有元新太郎宛　年代不明

拝啓、御書面に接し御無事の由受玉はり大慶の至りに存候、当方一同無異御安心被下たく候、

扨御申越の件々深く御推察申上候、然し貴君の如き地位に在る者は日本国中万を以て数ふべき事と存候、故に君は彼等を代表し、キリストの恩寵を以て君目下の困難に打勝たれて見ては如何、朝鮮行などは僕は大不賛成、神が君を此日本国に於て要し給ふ時は遠からずして到来すべし、君の目下為すべき事は「信頼」の一語に止るならんと存候、

僕遠からずして京阪地方へ到らん事を願ふ、其時は君を見ん事を欲す、僕近頃大に聖霊の力を感ず、今年は一奮発致し見たく存候、当時は例の深津先生も坂井先生も合同せられ多少内村征伐に従事せらるゝ様子、然し諸氏如何に力を尽すも内村の衷にあるキリストを殺す能はず、諸氏も亦俗人なるかな、僕は主の恩寵の諸氏の上にもあらん事を願ふ、神戸の左藤よりも時々手紙あり、彼は甚だ愛すべきやつ奴なり、彼は近頃新神学を発見せし由申来れり、然し惟ふに新神学にあらずして旧き旧きユニテリアン主義位ひと存候、彼は餘りに正直なる故そんな馬鹿主義に陥る事と存候、今年も夏期学校を開く積りなり、必ずヤッテ来り給へ、今年は大会を以て日本全国を振ひ起さん意気込に御座候

三月十五日夜

鑑三

新太郎君

〔封筒表〕美作国古町、有元新太郎様、貴答　〔封筒裏〕東京府豊多摩郡淀橋町字角筈百〇壱番地、聖書研究社、内村鑑三、三月十五日夜

△隅谷八朔とは、住谷天来のことである。

△有元新太郎宛書簡は、写真版として、同志社大学キリスト教社会問題研究室が所蔵している。

△住谷天来宛書簡は、同志社大学経済学部教授住谷悦治氏所蔵の一部である。

（校閲責任者　辻橋三郎）